

マーシャル諸島の核兵器国に対する I C J 提訴を支持する行動についての覚書

日本反核法律家協会 事務局長

弁護士 大久保 賢一

マーシャル諸島共和国政府¹は、4月24日、核兵器保有国9か国（イギリス、インド、パキスタン、中国、北朝鮮、フランス、イスラエル、ロシア、米国）を相手方として、核軍縮交渉を誠実に行わないことは核不拡散条約（NPT）6条や国際慣習法に違反することの確認などを求めて、国際司法裁判所（ICJ）に提訴した。

核実験被害国であるマーシャル諸島は、核軍縮交渉の誠実な遂行と完結を求めている ICJ の勧告的意見（1996年）に従っていない核兵器保有国は、「人間の正義」を拒絶していることになると主張し、違法性の確認と交渉を開始するよう命ずる判決を求めているのである。

この提訴は、非核兵器国政府による「核兵器のない世界」に向けての一つの具体的行動と評価することができよう。

当協会は、7月23日の理事会で、この提訴について「管轄権論争を乗り越えて、実体的審理に入り、核兵器廃絶を大きく進展させる契機となるよう激励のメッセージを送る。」との声明を採択した²。

そして、7月25日、マーシャル諸島大使館で、支持と連帯の意思をトム・D・キジナー大使に伝達した。大使館は、信濃町駅から徒歩10分程のマンションの一室のささやかな構えであった³。同行者は、天野麻依子弁護士と中嶋寛通訳の二人である。なぜか、トム大使に親近感を覚え、「やあ、トム!」という感じで接してしまったものである。（どうもこれは、不作法の極致らしい。知らないとは恐ろしいことである。）

大使とは、30分以上歓談することが出来、コクのあるコーヒーもごちそうになった。大使は、マーシャル諸島は ICJ だけではなく、米国連邦地裁にも提訴していることなどの情報の提供をしてくれた。そして、支持と激励に感謝すると述べたうえで、核兵器の最初の犠牲者を出している日本からの支援を期待するとの見解を表明した。

そして、反核法律家協会や日本の反核運動に期待するのは、マーシャル諸島は専門的な法律家が少ないので法的なサポートや、この提訴を支持するという政治的なアピールであると述べていた。

ところで、私たちが、今年の広島での原水禁世界大会にはマーシャル諸島政府の外務大

¹ マーシャル諸島は南太平洋にある、多くの島からなる人口約5万人の共和国。米国の水爆実験場とされた。

² 日本反核法律家協会「マーシャル諸島政府の核兵器保有国に対する I C J 提訴を支持する声明」<http://www.hankaku-j.org/data/jalana/140723.html>

³ 〒160-0012 東京都新宿区南元町9-9 明治パークハイツ 101号

臣が参加されることになっているのではと確認すると、大使はそのことについては承知していないようであった。在日大使が、本国の外務大臣の訪日日程を知らないなんてあるのか、と不安を覚えたり不思議な気分になったものである。

この不安は外務大臣の訪日中止という形で現実のものになってしまった。元々、外務大臣という激職の世界大会参加は不確定要素が多いのは想定範囲⁴であろうが、大会関係者ではない私たちとしても外務大臣と会うことを楽しみにしていたので、不参加は残念な事態であった。

外務大臣とは会えなかったものの、私たちは、広島で、世界大会に参加していたマーシャル諸島の元上院議員と在日公使と昼食を共にする機会を持つことが出来た。元上院議員はアバッカさんという立派な体格を持つ底抜けに明るく語る女性であり、公使はアネッタさんという眉目秀麗で物静かに語る女性であった。佐々木会長からはお二人に、当協会の声明全文を紹介していただいた。お二人は感慨深げであった。

私たちのこの声明がマーシャルの方たちにどのように受け止められているかは、これからの交流の在り方にかかってくるであろう⁵。

この提訴は、核兵器保有国にとっては、全く容認できないものであろう。とりわけ、米国にとっては「飼い犬に手をかまれた」かのような気分になっているかもしれない。当然、大きな抵抗が予想される場所である。そもそも、応訴すらしない政府もあるかもしれない。したがって、国際司法裁判所が、訴えの内容について審理できるかどうか不明である。

けれども、そのような困難はもともと想定されていたところである。にもかかわらず、マーシャル諸島共和国が提訴したことは勇気ある行動である。被害者が声を上げ、社会の共感を獲得し、その共感を規範の域まで高めない限り、加害者たちは知らぬ存ぜぬを通そうとするであろう。社会的圧力だけが、彼らの厚顔無恥を是正する力である。核兵器廃絶の原点は非人道性であることを忘れてはならない。

「核兵器のない世界」を求めて、あらゆる知恵と勇気を出し合うことは、必要なことであり有意義なことである。

私たちは、マーシャル諸島政府の英断に拍手喝さいを送るだけでなく、具体的な支援方策を検討しなければならないであろう。

ぜひ、皆さん方の英知を提供していただきたいところである。

(2014年9月11日記)

⁴ 原水禁大会関係者は、最後の最後まで予断は許さないとの覚悟はしていた。

⁵ 大石又七さんはマーシャル訪問をしておられる。